

地誌研年報13号, 2004年3月

ANREG 13, March 2004

東京都立大学地理学科における「地誌学概説」の授業内容

岩田 修二*

Contents of the Lecture “Introduction to Regional Geography” in Department of Geography, Tokyo Metropolitan University

Shuji IWATA*

目 次

- | | |
|------------------|-----------------------|
| I. はじめに | IV. 授業の進め方 |
| II. 担当することになった経緯 | V. 成績評価 |
| III. 授業内容 | VI. 地誌学概論の授業へのコメントと提案 |

I. はじめに

地誌学・地誌の重要性は、すくなくとも地理教育の分野では現在でもじゅうぶん認識されている。とくに高等学校の地理Bの3分の1は「現代世界の地誌的考察」で構成されている(文部省, 1999)。したがって、大学での地理教育においても、すくなくとも、教員養成教育(いわゆる教職科目)では、教員免許取得の必修科目であるため地誌関係の授業がいくつかおこなわれている。しかし、その大部分は個別地域の地誌であって、概説的な地誌学の授業(地誌学の原理や方法論を中心にあつかう授業)の具体例は、筆者の不勉強のためだが、わずかしかなかった。また、藤原(1997)・長谷川(1994)のほかには、大学レベル以上の地誌の概説書や概説的教科書は多くない。つまり、中等教育では必須とされながら、大学教育ではかなり無視されているのが地誌学概説(理論・方法論教育)の実際のところであろう。

筆者は1994年に都立大学地理学教室に着任して以来ずっと「地誌学概説」の授業を担当してきた。それは試行錯誤のくり返しであった。最近ようやく内容が固まってきたと感じているが、まだ不安がある。筆者が属する都立大学地理学教室の一部には、地誌は地理学ではない、とか、教職科目のためのもの、という認識がかつてあり、地誌学研究室を廃止した歴史をもつ。都立大学が廃校になり新大学になった後も、地誌学を軽視することがないことを願ってこのフォーラムを提出する。

* 東京都立大学大学院理学研究科 ; Department of Geography, Tokyo Metropolitan University

本論では、筆者のおこなってきた「地誌学概説」の内容を示し、授業内容へのコメントを読者からいただきたいと思う。いうまでもなく、概説を講じるということは、その分野の基本的な考え方をのべることであるから、筆者の地誌学に対する考えを示すことでもある。いただくコメントによって、都立大学の「地誌学概説」の授業を改善することを期待している。さらに、もし読者の方々の地誌学の授業や地誌学観へのご参考になれば幸いである。

II. 担当することになった経緯

「地誌学概説」の内容説明にはいる前に、なぜ、高山の地形研究を専門にしている筆者が、「地誌学概説」を担当することになったのかを簡単に説明しておきたい。

大学学部（明治大学文学部史学地理学科）の3年生まで筆者は、文化地理学（山村問題）や文化人類学に興味があり、その分野の授業・実習を他学部聴講や自主ゼミ活動などで勉強した。しかし、卒業論文でも大学院（東京都立大学理学研究科）でも地形学を専攻することになった（岩田，1992）。同時に、修士課程の時には地誌学研究室のセミナーにも出席していた。博士課程を中退した後、幸運にも都立大の地誌学研究室の助手に採用された。同僚には中村和郎（現駒沢大学）・小林 茂（現大阪大学）・片平博文（現立命館大学）の諸氏がおられ影響を受け、戸谷 洋教授の退職にあたっては論文集をまとめた（中村・岩田，1986）。その後、三重大学人文学部地誌学系に所属することになり、比較地域論やアジア地誌の授業担当となった。比較地域論は、科目名からは地誌学概説を連想させるが、じっさいには人文地理学概説の内容であった。しかし、ここでは前任の谷内 達助教授と学系代表であった長谷川典夫教授から指導を受けることができた。

その後、都立大の地理学教室に舞い戻ったが、助手時代の地誌学研究室の経歴のためか、三重大の地誌学系の経歴からか、地誌学概説の授業担当が割り当てられていた。まずは三重大でおこなっていた地誌学概説と同じプログラムで授業を始めたが、しだいに改善して地誌学の歴史や、現代に通用する地誌学を論じる部分を増やして現在に至っている。

III. 授業内容

1. カリキュラムでの位置づけと授業内容の大枠

地誌学概説は毎年開講される半期（2単位）の科目で、地理学科の標準履修表では2年

生から最終学年まで履修できる選択科目となっている。教職課程では、中学社会科（地理学）と高校地理歴史（地誌）の指定された専門科目（必修）となっている。したがって、受講者は、地理学科の学生と、他学部の文系学生であり、その比率は年によって大きく変わる。2003年度には36名が履修を申請し、そのうち地理学科の学生は5人だけであった。大学院生3名（うち一名は地理学専攻生）が含まれている。この36名のうち32名が単位を取得した。2002年までの年度では、受講生の半分以上が地理学科の学生であったので、2003年度の履修生の構成比率はこれまでと大きく変わっている。なぜ、このような変化が生じたのかはわからない。

今回紹介する授業内容は、2002年までの、地理学科の専門の学生が過半数をしめる状況を考えて構成したものである。図1に2003年度のシラバスを示した。半期15回の授業の内容は、地誌学の重要性、地誌と地誌学の歴史、現代の地誌、地誌の作成、中等教育における地誌教育の五つに分かれる。

以下ではシラバスに示した講義計画とは少し異なるが2003年度に実際におこなった授業の実績にしたがって、この五つの内容の要旨をのべる。ここでは、「説明した」とか「述べた」などの語は省いて内容そのものを示す。

2. 地誌学の重要性（1回目・2回目）

1回目・2回目はイントロダクションである。現実世界のさまざまな問題を空間的に整理する論理（spatial order）は重要である。系統地理学と地誌学とは異なったものであり、地域（世界）の分け方にはさまざまなやり方がある。そして、中・高校教育においては地誌教育が重要である。なかでもアジア諸国や発展途上国への偏見・差別をなくすのが地誌教育のポイントである。

3. 地誌の歴史（3回目～6回目）

人類が地理的空間をどのようにとらえてきたかという地域の認識については、メンタルマップによるこどもや市民の空間認識の例、考古学資料や民族学的資料の古地図の例から知ることができる。人類の空間認識は経験的空間を核にした同心円的空間認識であり、それは小学校からの地理教育にも生かされている。人類史のなかで、神話・伝説世界の空間認識、たとえば、地の果てのイメージ（エルドラドや未知の南方大陸など）が、ヨーロッパ世界の拡大の契機になったし、現在の世界の地名に生かされている。

文字記録に残された地誌の初期の例として、ギリシャ、ヘロドトスの「歴史」とわが国の「風土記」がある。それらはその後も発展（変質）しながら現代に引き継がれている。

<p>地誌学概説</p> <p>授業概要</p> <p>目的・目標：地誌学の基本的な考え方と方法論を学習するとともに、中学・高校での地誌教育の方法を考えよう。</p> <p>内容：Spatial order の重要性／中・高校教育における地誌教育の重要性／地誌の歴史：地域の認識、ヘロドトスの「歴史」、「風土記」とその系譜、近代地誌学の例、地誌の衰退（地誌学の例外主義、地理学革命と地誌）／現代の地誌：現代の地誌を読む、景観生態学・地生態学、地域の構造と地域区分／地誌の作成：地図の重要性とGIS／地域の記述：地域研究（Area study）の取り組み／中・高校教育における地誌教育：人びとの生活がわかる地誌。</p> <p>方法：主として講義ですすめるが課題の口頭発表も取り入れる。</p> <p>テキスト（教科書）：なし。</p> <p>参考書・参考文献、その他教材：</p> <p>最初の時間に指示する文献（下記13）のさまざまな地誌書から少なくとも1冊を選び、早い時期に読んでいただく。それは、学期末に提出していただくレポートの課題でもある。</p> <p>1) 中村和郎・高橋伸夫（編）（1988）：地理学への招待（地理学講座1）、古今書院。 2) 中村和郎・手塚 章・石井英也（編）（1991）：地域と景観（地理学講座4）、古今書院。 3) 長谷川典夫（1994）：地誌学研究—地誌作成法とその実例—、大明堂。 4) 藤原健蔵（編）（1997）：地域研究法（総観地理学講座2）、朝倉書店。 5) ジョンストン、R. J.・竹内啓一監訳（2002）：場所をめぐる問題—人文地理学の再構築のために—、古今書院、290 ページ。 6) 探求・学校の地理。月刊「地理」11月増刊、古今書院、1988。 7) 渋谷文隆（1990）：新「地理A」を創る。月刊「地理」6月増刊、古今書院。 8) 渋谷文隆（1990）：新「地理B」を創る。月刊「地理」7月増刊、古今書院。 9) 地理教育研究会（1999）：現代世界をどう教えるか1999。月刊「地理」8月増刊、古今書院。 10) 正井泰夫・小池一之（編）（1994）：卒論作成マニュアル：よりよい卒論作成のために、古今書院、214pp、2000 円。 11) 五百沢智也（1991）：地図を読む（自然景観の読み方9）、岩波書店、196pp、1500 円 12) 矢野桂司（1999）：地理情報システムの世界：GISで何ができるか、ニュートンプレス、250pp。 13) 別紙「さまざまな地誌書」のリスト</p> <p>関連科目：特に考慮していない。</p> <p>履修上の注意事項：教職課程の全学部共通科目でもある。レポートの作成には、かなりの時間を必要とするものを課すので覚悟しておくこと。</p> <p>試験・成績評価方法とその基準：出席状況（10%）、レポート（60%）、試験、口頭レポート（30%）の総合による。評価の割合は、履修者の学習状況によって変更することもあり得る。</p> <p>講義計画：</p> <p>1 回目：イントロダクション1：Spatial order の重要性／系統地理学と地誌学（地理学ケーキの食べ方）／地域の分け方（世界の分け方） 2 回目：イントロダクション2：中・高校教育における地誌教育の重要性／地理嫌い・偏見・差別をなくす地理教育 3 回目：中・高校教育における地誌教育：人びとの生活がわかる地誌 4 回目：中・高校教育における地誌教育：野外実習のやりかた 5 回目：中・高校教育における地誌教育：ビデオ教材 6 回目：地誌の歴史1：地域の認識（人類は地理的空間をどのようにとらえてきたか）：経験的空間＝同心円的空間認識（こどもの空間認識と地理教育；地の果てのイメージ） 7 回目：地誌の歴史2：ヘロドトスの「歴史」、わが国における地誌の伝統「風土記」とそれらの系譜 8 回目：地誌の歴史3：近代地誌学の例 9 回目：地誌の歴史4：地誌の衰退（地誌学の例外主義、地理学革命と地誌） 10 回目：現代の地誌1：現代の地誌を読む（1）地域の問題を扱う地誌 11 回目：現代の地誌2：現代の地誌を読む（2）自然と人間の関係を中心とした地誌：景観生態学・地生態学 12 回目：現代の地誌3：地域を打ち出した地誌：地域の構造と地域区分（日本地誌を例に） 13 回目：地誌の作成：簡便な地誌の作り方／地図の重要性とGIS（地域アトラスの作成） 14 回目：地誌の将来像／地誌屋の資質 15 回目：試験、レポートの提出</p> <p>オフィスアワー：火曜日5限</p>	<p>岩田 修二</p> <p>前期 火曜 6限 2単位</p>
--	----------------------------------

図1 2003年度のシラバス（教授細目）のコピー

東京都立大学理学部「2003年度理学部学部科目授業概要」98-99ページ（2003年4月1日）から。

つまり、現在の一般社会での地誌的なものへの需要は、知的好奇心によるものと実用的地域情報を求めるものとに二分されている。後者の例のひとつは、「江戸時代後半、地理学は最先端学術だった」と言えるほど、江戸時代末期から明治初期には地理学（世界地誌）が重視されたことである。箕作省吾（1845～6）の地理書はその一例である。

19世紀末に近代地理学が成立したのと並行して近代地誌学も成立した。すなわち、法則定立的科学としての系統地理学（自然科学的立場の地理学）が、カントの自然地理学講義によって始まり、フンボルトとリッターによって成立した（杉浦，1999）のに対して、地誌学は、ワレニウスの「一般地理学」から始まり、リッターの地理学の地域の比較として、個性記述的科学（人文科学的立場の科学）として成立した。リッターの比較地理学は地誌学としてリヒトフォーヘンに受け継がれ、ヘットナーによって盛んになった。

長谷川（1994）によると、その後の近代地誌学の系統は系統的地誌学（Systematic regional geography）・総合的地理学（Systematic Geography）・動態地理学（Dynamische Länderkunde）・景観論地誌学（Landschaftstheorie）にわけられ、1910年代から30年代にかけて、それぞれの分野を代表する地誌書が書かれた。このような近代地誌学は、ハートショーン（Hartshorn）によって頂点に達した。1939年のことである。そこでは真の地理学は地誌学であるという考えが強調された（ハーツホーン，1957）。

頂点に達した地誌学は衰退する。これは地誌学が地理学革命の波を受け計量地理学（ニュー＝ジオグラフィ）へと変わってゆく過程である。1953年にシェーファーは、従来のヘットナー、ハートショーン流の地誌を事実の羅列に過ぎないとして痛烈に批判した。この動向は地誌学例外主義批判として知られる（シェーファー，1976）。シェーファーのこの論文が、地理学の主流を地誌学から計量地理学にかえるきっかけになったとされる。シェーファーの地誌学批判のきっかけは、第2次世界大戦時のアメリカでの地域研究に地理学者が貢献できなかったことと関係がある。そして、実際に、地誌学が衰退するのは地域研究（area studies）などの新しい野外研究に負けたからであるといわれる。ここで言う地域研究とは、それまでの古典学術があつかえない、おもに第三世界の現実社会・文化を扱う社会・人文科学の集合体である。地域をあつかう点では同じでも、地域に関する個別学術諸分野の理解や地域情報収集に中心をおく地域研究と、地域性や地域そのものに関心がある地誌学とは、目的も方法も大きく異なる分野であるから、両者の単純な優劣の比較はできない。

地誌と地理学革命との関係に関連して、計量地理学は本当の地理学の革命ではないと批判し、現実の地域の問題を扱う地域学としての地誌の必要性を主張する意見がある（内藤，1990）。

シェーファーの地誌学批判以後も地誌書は作られ続けている。その理由はつぎの三つである。① 地誌学の方法は有効である。ある場所に生じている現象を、その場所における多くの事象と関連づけながら整理し理解するのは、地域や環境に関する科学の基本的な方法である（たとえば鴨沢，1980）。他の方法では解明できないことがわかる。② 地誌はおもしろい。具体的事実のおもしろさ，総合的であるおもしろさ，網羅主義的なおもしろさがある（岩田，1986）。③ 地誌学は自然と人間の関係を扱える。地域の総合的理解のためには，自然と人間との関係の理解が不可欠である。このような分野は，地理学（とくに地誌学），生態人類学，環境科学の一部に限られ，今後の重要性はますます大きくなる。

しかし，地誌書に対する評価は，地理学の内部でも，人文・社会科学諸分野でもかんばんしくない。これらの，多くの伝統的地誌書は退屈な本の代表とされる。そこで，地誌のこのような現状を踏まえて，現代で地誌書が生き残るために「退屈でない」地誌書に必要とされることはつぎの①～②であると考ええる。

① 人間の生きざまをダイナミックにとらえること。権力－非権力，差別の構造などを中心に据えて地域社会の本質をえぐり出す地誌がほんとうの地誌である（内藤，1990などの主張）。また，これが，退屈な地誌書から脱する方法でもある。

② 多くの地誌書に対しては「経験主義に強く依存する伝統的な地誌学」という批判が強い。これに対応するためには，計量地理学の手法や，社会科学的・生態学的手法など近隣諸分野との対話が可能な方法論を取り入れる必要がある。

4. 現代の地誌を読む（7回目～10回目）

ここでは，上記 ① ② にのべたような地誌のあるべき姿を具現した（しようとしている）地誌学書・地誌類書を紹介する。ここでは，最近のものから，あるべき姿に近い地誌書や，別の分野のものではあるが地誌的な要素をもつすぐれた本，あるいは関連する図書・論文を紹介する¹⁾。

(1) 地域の問題を扱う地誌

・ジョンストン (2002) 『場所をめぐる問題』中のモノグラフ「第4章」「第5章」

イギリスの地理学者ロン・ジョンストンは，1991年に人文地理学の再建を提唱した本書で地誌学の動向を論じた。1970～80年代におこった伝統的な地誌学への回帰を批判し，新しい場所研究の創造の例として「ロカリティ」に重点をおいた研究の例を示した。ジョンストンの主張は，経験主義に強く依存する伝統的な地誌学では地理学は再建できないが，中心に地域・ロカリティ・場所の研究を据えないと地理学は滅びるというものである。この主張は地誌を重視する考えに通じる。彼の言う，ある場所をほかの場所と区別するもの

は、自然環境・建造環境（人工的景観のすべて）・人びと（労働の組織，社会生活の構成，政治の構成など）であり，もちろん人びとが最重要である。人びとをとらえる指標としては，文化的差異・社会諸関係，国家機構内部での組織間の闘争，労働の場における社会関係などがあげられており，例示されている論文は広域的な地域特性をあつかう人文地理学そのものではあるが，総合的・網羅的な地誌からはほど遠いように見える。

・マレー（1994）『ノーマネー，ノーハネー：ジャカルタの女露天商と売春婦たち』

この本はジャカルタの都市問題を長期の参与観察によって描いたもので，地域の個性を描いた地誌書として評価が高い。熊谷によると「見事な現在進行形のジャカルタの都市誌である」（岩田ほか，1999）。著者が地理学者であることは，著者自身が作成した大縮尺地図を含む12葉の地図が含まれていることからわかる。ルポルターージュとしてもおもしろい本である。

・深尾葉子・井口淳子・栗原伸治著（2000）『黄土高原の村－音・空間・社会－』

文化人類学者の調査記録には地域社会や人びとの生活が生き生きと描かれおもしろいものが少なくない。そのような本と地誌書のちがいを示すために取りあげた。岩田（2001）は，村の生業や環境破壊のことが書かれていない，地域の全貌が描かれていない，などの点を指摘したが，逆に地理学者の書いた本の多くは人間が描かれていないという問題点がある。

（2）自然と人間の関係を中心とした地誌

自然と人間の関係をあつかう分野は地理学の中でも景観生態学・地生態学などと呼ばれ地理学の中でもっとも重要な分野の一つである。しかし，都立大学地理学科の授業では「環境地理学」という授業であつかうので「地誌学概説」では簡単なあつかいとどめている。

・今西錦司（1944）『ポナペ島：生態学的研究』

・吉野正敏（1997）『熱帯中国－自然そして人間－』

・山本紀夫・稲村哲也（2000）『ヒマラヤの環境誌：山岳地域の自然とシェルパの世界』

これら3冊の本は，比率には違いがあるが，地理学者と気象学者，生態学者，文化人類学者などが協力して地域の自然と人間との関係を明らかにしようとしたものである。自然環境がいかに関係しているかはよく描かれているし，みんなおもしろい本である。しかし，『熱帯中国』に関しては書評（岩田，1997）にも書いたように，この3書に共通して言えることは，地域を統合している原理や地域を特徴づける仕組みがきちんと書かれていないのが難点である。『ヒマラヤの環境誌』には筆者も関与していた。編集の最終段階で地域の統合原理を組み込むことを試みたが材料不足で断念した。

(3) 地域の統合原理を打ち出した地誌

・山本正三・朝野洋一 (1976) 「H. カロールの農業地理学の考察体系と南アフリカ、カール地方の農業景観」

(1)のジョンストンの「ロカリティ」に重点をおいた研究もまだ完成途上であるので(ジョンストン, 2002), (2)の3書に対して筆者が強調した「地域を統合する原理」を明確にしないと現代的な地誌はできないことになる。地域を統合する原理としてわれわれがすぐ思いつくものがある。等質(形態)地域の概念しかなかったハートショーンの時代から地理学が大きく変わったのは、地域統合の原理として機能地域の概念が生まれたことである。機能地域を打ち出した地誌として有名なのは、1952年のCarolの地誌である(山本・朝野, 1976)。それを発展させたフィルブリックは、世界を等質地域によって区分し、それを機能地域区分でまとめるといふ形をつくった(Philbrick, 1963)。

・岩田修二 (1986) 「地誌のための地域区分の方法: 日本列島を例にして」

筆者も日本地誌をつくるための日本列島の地域区分の等質地域区分と機能地域区分をおこない、日本列島地誌の目次を作ったことがある。その方法は ① 多くの均質地域区分を重ね合わせて景観的地域区分をおこなう(基礎的景観区分: 1930年以後の伝統的地誌学の方法), ② 主要な産業に関する均質地域区分と機能地域区分をあわせて経済地域区分をおこなう(1960年代までの経済地理学的方法による), ③ 人・もの・情報などの流れにもとづいた日本の機能的まとまりを明らかにする(1970年代以降の計量地理学的方法による), ④ これらをまとめて地域の統合原理を考えた。上記の ③ 機能的なまとまりを中心にして, ①, ② もあわせて日本列島を地域区分し, 上記①, ②, ③ で重視した情報を考慮して日本列島の機能を考えた。

・手塚 章 (1996) 「フランスにおけるコレーム地理学の展開とその問題点」

岩田(1986)執筆後, このような地域の統合原理をしめす図的表現があり, 地域構造図とよばれていることを知った。地域構造図には2種類ある。いずれも地域でみられる諸要素と諸原因・諸因子の相互関係を示すが, ① 影響関係をしめした相関図と ② 空間的に示した地図とである。後者は, コレーム chorme と呼ばれる地域を性格づけている単純なパターン要素を用いたフランスのものがよく知られている(高橋, 1989; 手塚, 1996)。しかし, これらの地域構造図は, ほとんどが経験主義的なものであって, 空間の法則性を追求する地理学者や地理以外の社会科学諸分野の研究者から受け入れられているとは言い難い。そうかといって, 計量地理学的手法や社会科学の理論をもちいた地域や場所の研究によって, 上記で示したような地域構造図が作られたのをみたことがない。現実の地域は複雑すぎて, 計量的手法ではデータ量が多くなりすぎるし, 複雑な現象のすべてに当ては

まる理論も存在しないからであろう。地誌学でも、計量地理学的・社会科学的方法で描く努力を精一杯おこなう必要があるが、それが完成するまでは、地誌学としては経験主義的な地域構造図を利用してゆくしかないであろう。科学的でない地域構造図であっても、これらは地域の理解を助け、地誌にとっては意義のあるものであると考えている。

5. 簡便な地誌の作成 (11回目)

これまで述べてきたとおり、現代的な意味のある地誌をつくるのは簡単ではない。しかし、理想的な地誌とはいえなくてもいくらかは意味のある地誌を作る必要はある。なぜなら社会一般からの地域を総合的に理解したいという要望は増えるばかりであるからである。したがって簡便な地誌の作り方も地誌教育としては考える必要がある。そこで簡便な地誌の作り方を示す(表1)。この方法は、糊とはさみによる、いいかえると「人のふんどしによる地誌」である(岩田, 1998, 2000)。地誌作成にとって地図の重要性とGIS(地域アトラスの作成)の重要性は言うまでもない。それ以上に重要なことは、おもしろい地誌を作ることに情熱を燃やす地誌屋の資質といえるものである。すべての地理屋が地誌屋としての資質をもっていないのを残念に思う。

数年前までは、地形図の利用法や野外観察の方法などを、おもに地理学科以外の学生に教えるために日曜巡検も含めて実施しその結果を地誌の形式にまとめさせていたが、地理学科の学生には繰り返しになるので現在は実施していない。

表1 簡便な地誌を作る手順

ステップ	作業	注意する点
1	ナショナル・アトラス(国勢地図帳)などの主題図を集積し積み重ねる	GISと数理的空間分析などを利用
2	地域のフレームワーク(枠組み)を設定する	
3	自然環境(とくに環境問題など)、社会、文化などの地域情報を収集する(簡便には「暮らしのわかるアジア読本」などの地域情報を利用する)	文化人類学・社会学などの情報、メディア情報も忘れないこと
4	3の情報を2のフレームワークに当てはめて配列する	地誌作成者としての能力をフルに発揮する
5	4に基づいて地域構造図を考案・作成する	

6. 中・高校教育における地誌教育 (12回目~14回目)

これまでさんざん言われている「地理嫌いをつくらない」教育、興味をもたせるための「人びとの生活がわかる地誌」が重要であることを学習指導要領や高校教科書もちいてしめす。地域調査(野外実習)のやりかたも示すが、上で述べたように野外で実施はしていない。

ビデオ教材は地誌教育に非常に重要であると考えているので、関連する資料を配付したうえでビデオ教材の実例を見せている。教材用に作成されたものにはいいものが少ないと考えているので、よく見せているのはNHK特集の「中国の一人っ子政策」(1991年7月14日放映)のようなものである。このビデオは、一人っ子政策の矛盾、都市と農村のちがいが、中国の行政のあり方などがよくわかる良い教材であると思っている。

IV. 授業の進め方

講義である。教科書は使わず配付資料を用意する。授業中、多くの文献を紹介・引用するので、それらからの抜粋を資料にしたものが多い。その時間に話す内容のレジユメも用意する。授業評価学生アンケートによると、これらの配付資料は評判がよい。授業中に参照する文献についてできるだけ事前に読んでもらいたいので、学期はじめにリスト(表2)を配って早めに読むよう勧めている。しかし、こちらの期待とはうらはらに、必要な場面で読んだ結果を発表してくれる学生はめったにいない。

V. 成績評価

成績評価は複数の方法によっている。もっとも重視するのは指定する文献を読んでレポートしてもらうことである。指定する文献リストは表2に示した。大部分は授業中に触れる地誌書や類似の出版物である。古典的地誌や、地誌学方法論、少し前の地誌書とその類書、最近の地誌書とその類書の例を含んでいる。レポートが単なる感想文に終わらないように次の1)～6)の項目にしたがって書いてもらうことにしている。1) その本を選んだ理由、2) 内容の紹介(サマリー)、3) おもしろかった点、興味深かった点など、よい面、4) つまらなかった点、無意味、誤りなど、批判すべき点、5) 地誌学あるいは地誌書の発展史のなかでどのように位置づけられるか、6) 現代的な地誌書を作成する場合に役立つ点があるか無いか、あるとすればどういう点か。このレポートでは要求していないが感想意見が付けられているものが多く参考になる²⁾。学生のかかなりの数が熱心に読んでいる。表2の「最近の地誌書とその類書」の欄にあげたものは好評である。

授業の15回目には試験をする。年によっては期末レポートにする場合もある。2003年度はレポートにした³⁾。

表2 さまざまな地誌書および類似の出版物のリスト

区分	地誌書および類似の出版物
古典的地誌	ヘロドトス著、松平千秋訳 1972 (紀元前450年頃刊)：歴史 上中下、岩波書店 (文庫). ストラボン著、飯尾都人訳 1994 (紀元頃刊)：ギリシャ・ローマ世界地誌 I, II, 龍溪書舎 玄 奘, 水谷真成訳 1971：大唐西域記 中国古典文学大系22, 平凡社.
地誌学方法論	吉野 裕訳 1969 (713-733年頃刊)：風土記, 平凡社 (東洋文庫145). ヘットナー, 平川一臣ほか訳 2001 (1927年刊)：地理学：歴史・本質・方法, 古今書院 ハーツホーン著, 野村正七訳 1957：地理学方法論：地理学の性格, 朝倉書店. シェーファー, 野間三郎訳 1976：地理学における例外主義：その方法論的吟味, 野間三郎編『空間の理論』古今書院, 14-47. 熊谷圭知・西川大二郎編 2000：第三世界を描く地誌-ローカルからグローバルへ, 古今書院
少し前の地誌書とその類書の例 (評判の高いもの)	今西錦司編 1944：ボナベ島：生態学的研究, 彰考書院. 今西錦司 1952：村と人間, 新評論社. 山本正三・朝野洋一 1976：H. カロールの農業地理学の考察体系と南アメリカ, カルー地方の農業景観, 尾留川ほか編：地域調査 (現代地理調査法 IV), 朝倉書店, 259-317. JOHN, Brian S. 1984: Scandinavia: A New Geography, Longman, London, 福井捷朗 1987：ドンデン村-東北タイの農業生態, 東南アジア研究叢書 22, 創文社.
最近の地誌書とその類書の例 (評判の高い単行本)	友杉 孝 1990：スリランカ・ゴールの肖像-南アジア地方都市の社会史, 同文館. 石塚道子編 1991：カリブ海世界, 世界思想社. 杉浦芳夫 1992：文学のなかの地理空間-東京とその近傍, 古今書院. アリソン＝マレー著, 熊谷圭知ほか訳 1994：ノーマネー・ノーハネー：ジャカルタの女露天商と売春婦たち, 木犀社. 吉野正敏編 1997：熱帯中国-自然そして人間-, 古今書院. 斎藤 功・松本栄次・矢ヶ崎典隆 1999：ノルデステ-ブラジル北東部の風土と土地利用, 大明堂. 深尾葉子・井口淳子・栗原伸治, 2000：黄土高原の村-音・空間・社会-, 古今書院. 山本紀夫・稲村哲也編著, 2000：ヒマラヤの環境誌：山岳地域の自然とシェルパの世界, 八坂書房.
地誌書とその類書の例 (シリーズもの)	日本地誌研究所編, 1967：日本地誌 (全21巻)：二宮書店. 全訳「世界の地理教科書シリーズ」(全30巻) 帝国書院, 1977～80： 週刊朝日百科「世界の地理」(全121冊) 朝日新聞, 1983～86. 田辺 裕 (監修)「図説大百科 世界の地理」朝倉書店, 全24巻, 1996～. もっと知りたいシリーズ, 弘文堂. 暮らしがわかるアジア読本シリーズ, 河出書房新社. 雑誌 (月刊)：ナショナルジオグラフィック日本版, 日経ナショナルジオグラフィック社. ガイドブック：地球の歩き方, ダイヤモンド・ビッグ社.

2003年4月15日配布のもの

VI. 地誌学概論の授業へのコメントと提案

これまで述べてきた授業の内容に関する若干の補足説明をしたい。

1. 重視している点：この授業は地誌学をプロモートする授業であると考えているので当然「地誌は必要であり、不滅である」という主張をしている。この文脈の中で授業でもっとも重点をおくのは、a) 地誌学が地理学革命の波を受け計量地理学（ニュージオグラフィ）へと変わってゆく過程と、b) 現代で地誌学が生き残るために地誌学に必要なとされるものは何かの2点である。

2. あまり重視していない点：ヘットナーからハートショーンまでの古典的な地誌の詳細はしない。この点に関しては、三重大学にいたとき長谷川典夫教授から叱られたことがある。「ドイツ語の原典を読まないで地誌の授業はできない」と。この点ではヘットナーの1927年刊の著書が平川教授などによって翻訳されたのはありがたい（ヘットナー、2001）。しかし、地理学史の研究ではないから古典的な地誌をスキップするのも許されると考えている。

3. いわゆる地理革命について：地誌学が地理学革命の波を受け計量地理学（ニュージオグラフィ）へと変わってゆく過程は、おおくの人文地理学の教科書が過大評価している（たとえば坂本・浜谷、1985）と感じられる。杉浦（1991）によれば、シェーファーはアメリカの地理学界にはそれほど大きな影響を与えなかったという。

つぎに、筆者のこれまでの乏しい経験にもとづいて、これからの地誌学概論の授業プラン・授業内容を考えるとき考慮すべき点について提案をさせていただきたい。これらは、地誌学が生き残るためにこれからの地誌学に必要なとされるものでもある。

1. 誤った地域イメージを払拭する努力：世界のおおくの地域にはそれぞれに固定化されたイメージがつきまとっている。ネパールの場合の「ヒマラヤの秘境、神秘の国」などのようなものである。テレビなどの地域情報番組（とくに、いわゆる秘境もの）には、このような誤った地域イメージを再生産するものが多いのは事実である。地理研究者・地理教師の立場からの番組批評が必要であろう。

ネパールの困難な政治的・社会的状況が日本に伝わらない最大の理由は、日本のジャーナリズムが流す、あやまった地域イメージを強調する情報のためであると山本（1993）は言い切っている。地誌学の教育が、そのようなマスコミと同じ事をしていないかという反省は常にもっておく必要がある。そのためには、次項で述べる「現実の社会の問題」から目をそらさない問題意識を教師自身がもち、そのような教育をおこなわなければならない。

2. 「現実の社会の問題」から目をそらさない教育：これは「人間の生きざまをダイナミックにとらえること」ともいえよう。これは、他の社会科学諸分野がおこなっているように地域社会の矛盾をえぐり出し問題解決へ策を提出することである。そのためには長期間のフィールド＝ワークを経験した特定地域のスペシャリストが必要である。それと同時に地域への認識論や方法論を鍛え洗練してゆく必要がある（熊谷，1996）。あるいは「現代世界の地誌に求められるのは、フィールドワークに依拠しながら、ローカルな環境と主体としての人間（文化社会）の相互作用を生き生きと描き、それらをさらにより大きな地域・国家・社会の枠組みの中の的確に位置づける」ことと熊谷は述べる（岩田ほか，1999）。

3. 地誌学の方法と独自性：上記2.を進めると地誌学は社会学や文化人類学などを含む地域研究にきわめて近くなる。1人の地理学者が、社会学者や文化人類学者に対抗してそれらを超える研究をするにはかなり困難であろう。すくなくとも、従来以上の長期のフィールドワークが必要である。同時に①系統地理学の諸分野の地理学者がチームを組み共同研究をおこなう（Ackermanの考え方：杉浦，1987）、②土壌学・生態学・農学・社会学・文化人類学・地域経済学など、関連野外科学諸分野の専門家と地理学者がチームを組み共同研究をおこなう、という方法が必要になるだろう。

しかし、このようにして、ダイナミックな人間の生きざまや社会の矛盾が描き出されたとしても、地誌学が社会学や文化人類学になってしまっただけでは元も子もない。それでは、これらの地域研究の諸分野と地誌学とのちがいを生むのは何か？それは、地域の統合原理（地域構造図など）を堂どうと正面に打ち出すことであると考え。

4. 「経験主義に強く依存する伝統的な地誌学」から脱すること：このためには、計量地理学の手法や、社会科学的・生態学的手法など近隣諸分野との対話が可能な方法論を取り入れる必要がある。このために必要なことは、地理学専攻の学生にも、社会科学・自然科学諸分野でおこなっているような教育を課すしかないと考え。社会学や経済学分野と共同研究できるような最低限の社会科学の基礎教育、あるいは、数学・物理・化学の基礎教育が必要である。とはいえ、そのような教育をするとそういう学生は、地域の複雑で、網羅的にあつかうべき現象に関心をもたず、せまい特定な問題にしか関心を持たなくなる恐れがある。この点の克服は困難な課題である。学生が広い分野に関心を持たなくなることを難しくしているのは、ひとつは、日本の教育が高校から文系と理系とに分かれていることであり、ひとつはしっかりした野外教育が欠けている（岩田，1997）からであると思う。

5. 個別記載学術としての地誌学の維持：地理学が空間を分析する科学としていつそう

努力していく必要があるのは当然である。しかし、地理学は科学（サイエンス）としてだけで存在するのではない。科学からははズれるけれども個別記載学術としての地誌学を維持し続けないと科学としての地理学もつぶれる。それは、害虫・防疫・農業資源科学としての昆虫学しか大学には残っていないが、それを支える広範な（アマチュア学術としての）昆虫分類・生態研究が大学の昆虫研究を維持しているのと同じである。

[謝辞]

ここまで私が地誌学概説の授業を楽しんで講義できたのは多くの先生・先輩諸氏と学生諸君のおかげである。感謝いたします。本文中での敬称は省いたことをお許しいただきたい。

注

1) 長谷川 (1994) には B. S. John: *Scandinavia: A New Geography*, 1984 ; P. L. Knox: *The Geography of Western Europe*, 1984; G. W. Hoffman: *Europe in the 1990's: A Geographic Analysis* などが現代の優れた地誌書として挙げられている。しかし、これらのほとんどは都立大学の地理学教室には備えられていないので、これらがおもしろい地誌であるかは筆者には判断できない。

2) 地誌レポート感想からの抜粋 2003年度

1. 地誌の楽しさ

「すごくおもしろいと思った。なぜならカリブ海についての叙述がすごく細かくてまるで自分がその地域に出かけたような気分させてくれるからだ」『カリブ海世界』法学部4年

「東京の地誌書としてすばらしい。また、地誌の最大の魅力である「面白さ」を存分に引き出した内容である」「本来、地誌書というものは場所の個性を明示してしかるべきものであるのに、文学作品の方がしっかりと場所の個性を明示している」『文学のなかの地理空間』理学研究科修士1年(地理科学)

「おもしろさという部分はどんな学問においても必要である。そのことを私は忘れていたような気がする。学問が面白いものであることを改めて教えてくれたこの本と著者たちに感謝の意を表したい」『ヒマラヤの環境誌』経済学部3年

2. 自然と人間との関係

「農業に関する記述の部分で、人やその土地の文化との関連性が記述されている点が興味深かった。私自身に地理という学問が本来述べるべきなのはこういう人と自然の相互影響性、自然に規定される人の方向性なのではないか」「人々の暮らしの息吹が聞こえてきそうな地誌を書くという点ではまだまだ不足」『熱帯中国』人文学部2年(社会学)

3. 地誌・地域情報への批判

「記述の中に西欧からのバイアスを感じた」「土地が育んできた文化や価値観に対する尊重や敬意が感じられない表現や、記述者の価値観の押しつけともとれる表現がいくつか目についた」「執筆者の殆どがイギリス人であるからではないかとも思われた」『図説大百科 世界の地理15 西アジア』人文学部3年(史学)

「全体として地理的要素が少ないために各分野を関連させるのが難しくなっている」『暮らしがわかるアジア読本「中国」』人文学部2年(史学)

「この本は近代地理学としての地誌学には位置づけられず、むしろ読者の知的好奇心を満足させる地誌・ガイドブックのようなものと見ることができる」『暮らしがわかるアジア読本「中国」』人文学部2年(史学)

- 3) 期末レポート：世界（日本をふくむ）から一つの地域（広さは自由）を選び出し、① 地域構造図を図に描け、② 作成するとき用いた資料（文献など）や根拠（たとえば自分の調査など）を記述すること。A4用紙2枚以内にまとめること。

文 献

- 今西錦司編（1944）：『ポナペ島：生態学的研究』彰考書院。
- 岩田修二（1986）：地誌のための地域区分の方法：日本列島を例にして、中村和郎・岩田修二編著：『地誌学を考える』古今書院，pp.36-55。
- 岩田修二（1992）：登山と地理学—山をフィールドにすべきかについての個人的体験。地理，第37巻11号，pp.29-34。
- 岩田修二（1997）：大学院における地理学の野外教育。地学雑誌，第106巻，pp.820-825。
- 岩田修二（1997）：書評・紹介 吉野正敏編：熱帯中国—自然そして人間。地学雑誌，第106巻，pp.752-753。
- 岩田修二（1998）：書評 酒井治孝編：ヒマラヤの自然誌—ヒマラヤから日本列島を遠望する—／石井溥編：暮らしがわかるアジア読本—ネパール—。地理学評論，第71巻 A，pp.776-777。
- 岩田修二（2000）：地域研究を地誌に改造する方法：ネパールを例に。地誌研年報，第9巻，pp.33-46。
- 岩田修二（2001）：書評：深尾葉子・井口淳子・栗原伸治著：黄土高原の村—音・空間・社会—。地理，第46巻2号，p.111。
- 岩田修二・内田忠賢・熊谷圭知・高岡貞夫・水野 勲・山川修治（1999）：地理学を楽しむための五十冊。朝日新聞社『アエラムック 地理学がわかる』，pp.149-155。
- 鴨沢 巖（1980）：場の学としての地誌。地域，第3巻，pp.66-70。
- 熊谷圭知（1996）：第三世界の地域研究と地誌学—その課題と可能性—。地誌学研究年報，第5巻，pp.35-45。
- 坂本英夫・浜谷正人編著（1985）：『最近の地理学』大明堂。
- シェーファー・野間三郎訳（1976）：地理学における例外主義：その方法論的吟味。野間三郎編：『空間の理論』古今書院，pp.14-47。
- ジョンストン，ロン・J. 竹内啓一監訳・高田普久男訳（2002）：『場所をめぐる問題—人文地理学の再構築のために』，古今書院。
- 杉浦芳夫（1987）：Ackerman とアメリカ地理学の「体制化」—計量革命に関する—考察。地理学評論，第60巻 A，pp.323-346。
- 杉浦芳夫（1991）：Schaefer の「例外主義」論文誕生の顛末に関する—考察。地理学評論，第64巻 A，pp.303-326。
- 杉浦芳夫（1999）：地理学の歴史 歴史の地理学。朝日新聞社『アエラムック 地理学がわかる』pp.81-87。
- 高橋伸夫（1989）：フランスの地域構造図。地理月報，367号，p.15。
- 手塚 章（1996）：フランスにおけるコレーム地理学の展開とその問題点。地誌研年報，第5巻，pp.21-34。
- 内藤正典（1990）：地理学における地域研究の方向。地理，35巻4号：pp.33-42。
- 中村和郎・岩田修二編著（1986）：『地誌学を考える』古今書院。
- 長谷川典夫（1994）：『地誌学研究—地誌作成法とその実例—』大明堂。
- ハーツホーン，野村正七（訳）（1957）：『地理学方法論：地理学の性格』朝倉書店。
- 藤原健蔵編（1997）：『地域研究法（総観地理学講座2）』朝倉書店。
- 深尾葉子・井口淳子・栗原伸治（2000）：『黄土高原の村—音・空間・社会—』古今書院。
- ヘットナー，平川一臣ほか訳（2001）：『地理学：歴史・本質・方法』古今書院。
- マレー，アリソン著（熊谷・内藤・葉訳）（1994）：『ノーマネー，ノーハネー：ジャカルタの女露天商と売春婦たち』木犀社。

- 箕作省吾 (1845-6) : 『坤輿図識』国会図書館蔵.
- 文部省 (1999) : 『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』実教出版.
- 山本真弓 (1993) : 『ネパール人の暮らしと政治』中央公論 (中公新書).
- 山本正三・朝野洋一 (1976) : H. カロールの農業地理学の考察体系と南アフリカ, カルー地方の農業景観. 尾留川ほか編『地域調査』朝倉書店, pp.259-317.
- 山本紀夫・稲村哲也編著 (2000) : 『ヒマラヤの環境誌: 山岳地域の自然とシェルパの世界』八坂書房.
- 吉野正敏編 (1997) : 『熱帯中国-自然そして人間-』古今書院.
- Philbrick, A. K. (1963) : *This Human World*, John Wiley, New York.